

## II サムエル 12:13(KJB)で LORD が主語なのに put away が使われている理由

通常、put away(動詞)は人間が主語の場合に使われるので、矛盾しているのでは？

**欽定訳** : And David said unto Nathan, I have sinned against the LORD.

And Nathan said unto David, **The LORD** also hath **put away** thy sin; thou shalt not die.—2 Samuel 12:13—

**新共同訳** : ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」(→真の悔い改め、詩編 51 編)  
ナタンはダビデに言った。「その**主**があなたの罪を**取り除かれる**(←誤訳?)。あなたは死の罰を免れる。

**口語訳** : ダビデはナタンに言った、「わたしは主に罪をおかしました」。ナタンはダビデに言った、「**主**もまたあなたの罪を**除かれました**(←誤訳?)。あなたは死ぬことはないでしょう。

**聖協共訳** : ダビデはナタンに言った。「私は主に罪を犯しました。」ナタンはダビデに言った。「**主**もまたあなたの罪を**取り除かれる**(←誤訳?)。あなたは死なない。

**新改訳** : ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「**主**もまた、あなたの罪を**見過ごして**くださった。あなたは死なない。

▶ **The LORD** also hath **put away** thy sin;

גַּם־יְהוָה הֵעִבִיר תְּטָאֲתָךְ לֹא תָמוּת = 直訳: 「主もまた、あなたの罪を通り過ぎさせた。」

→hath **put away** = עָבַר 'ābar, aw-bar': 通り過ぎる、移す、取り去る、越えさせる

③ 抹消 blot out や破壊 destroy ではない。

→put away: 視界・関係・裁きの対象から取り除く、存在否定ではない、刑罰の免除・距離化=懲らしめを伴う赦し

→blot outが使われない理由: II サム 12 章は、王(ダビデ)と神との関係の回復

destroyが使われない理由: ダビデは裁かれるべきだが、滅ぼされるのではなく、生かされる。

→KJV 訳者の神学的配慮: 「主が罪を脇へ移された」、だから刑(死刑)は執行されず、ダビデ本人は生かされる。しかし、罪は残り、後に大きな影響を及ぼす(サム下 12:10=家の剣、サム下 12:14=子の死他)。

→LORD が主語でも put away が成立する理由

put away: 神がダビデの罪を裁きの対象から外す→①神が put away する時: 恩赦的宣告、②人が put away する時: 道徳的応答

▶ 神学的整理

動詞	行為者	結 果
put away	神	死刑免除・関係維持
blot out	神	最終審判での完全抹消
destroy	神	反逆者の最終的滅び

▶ II サムエル 12:13 (KJV) で LORD が主語なのに put away が使われている理由

II サムエル 12:13 で put away が使われたのは、ダビデの真の悔い改め(→詩編 51 編)により、神がダビデ(罪人)を滅ぼすのではなく、罪を裁きの場から“移動させた”、つまり、裁きの対象から外したことを示すためである。

**【参考】** 旧約聖書時代における「神」と「王」との関係は、周辺諸国の「王=神的存在」という考え方とは異なり、神が絶対主権者であり、王はその代理・しもべにすぎないという点に大きな特色があります。→申命記 17: 18~19a 王座に着いたら、レビ人である祭司のもとにある書き物(=祭司たちが正式に保管・管理していた「主の律法[トーラー]」の正本[公的写本])に基づいて、律法の書を書き写し、傍らに置いて、生涯、これを読みなさい。

→サムエル記上 10: 1 サムエル(→士師であり、預言者であり、祭司的役割も担った、神ご自身によって立てられたイスラエルの霊的指導者、士師制から王制への橋渡し役)は油の小壺を取り、サウル(→イスラエル初代の王)の頭に油を注ぎ、口づけして言った。「主があなたに油を注ぎ、ご自分の民の指導者とされたのです。